

2. 『身延鑑』

身延山31世日脱上人が1685年(元禄時代)に執筆されたといわれ、広く知られている内容です。

老僧が客人を案内して「池大神」の祠の前に来たときに、客人が「池大神」の本地はどのような仏菩薩なのか、いつのころから七面山に垂迹されて末法の守護神となったのか、そして、七面という謂われを問います。それに対して、老僧は次のように答えました。

「本地は弁才天・功德天で、鬼子母神の御子でございます。右手に施無畏の鍵を持ち、左手には如意珠の玉をお持ちになっています。北方畏沙門天王の城、阿毘曼陀城妙華福光吉祥園(あびまんじょう みょうけふっこうきっしょうえん)にいらっしゃるので、吉祥天女とも申し上げます。

山を七面という由来は、この山には八方に門がありますが、鬼門を閉じて聞信戒定進捨懺の七面を開き、七難を祓い、七福を授け給う七不思議の神が住まわれているので、七面と名づけられたということです。

末法護法の神になられた由来は、日蓮大聖人が読経されている庵室に、ある日、柳色の衣に紅梅のはかまを着した二十歳ぐらいの気高い女性がやってきて、日蓮大聖人のお側近くに座りました。大旦那の波木井実長をはじめ一座の人々は、これを見て驚き、不審に思いましたが、大聖人はかねてよりその御正体を知っていらっしゃったので、その女性に「あなたは、この山中では見かけない方ですが、毎日どこからいらっしゃるのですか」と尋ねますと、その女性は「私は七面山の池に棲んでいるものでございます。法華経の功德により三つの苦しみから逃れることができました。どうか結縁していただけないでしょうか。」と答えられたので、大聖人は輪円具足の大曼荼羅をお授けになりました。女性に名前を問うと「巖島女といひます」と答えました。それを聞いて、「では、安芸国巖島の女神でいらっしゃいますね」とおっしゃると、女性は「はい、私は巖島の弁才天でございます。霊山で末法護法の神になる約束をいたしました。」大聖人が、「垂迹の姿を見せてください」と清浄な水で満たした水差しを渡しました。女性がその水に影を映すと、たちまち一丈あまりの赤竜となって花瓶を纏ったので、実長も郎党もみな疑いを晴らしました。女性は元の姿に戻り、「私は霊山會上で仏の摩頂の授記を得ました。法華経を受持する者には七難を祓い七福を授けますが、誹謗する輩には七厄九難を与えます。九万八千の夜叉神は私の眷属です。身延山においては水火兵革等の七難を祓い、七堂を守ります」と固く誓約して、この池に帰ってこられたのです。

3. 『七面大明神縁起』

小湊誕生寺26世の中院日孝上人が書かれました。延宝8(1680)年ころといひます。本書では、六老僧の口伝として日蓮聖人が提婆達多品を説いていたときに蛇形が来て聴聞していましたが、日蓮聖人はこの蛇を「8才の龍女である」と言われた、という口碑を述べています。

※「女人成仏」が可能であることを説いた『妙法蓮華経提婆達多品第十二』に登場する龍女のことだと思いますが、海徳寺の七面天女さまは可憐な童顔で、この「8才の龍女」のように思われるのは私だけでしょか？

4. 七面大明神の縁日

日蓮大聖人は七面大明神のお棲まいになる七面山に登り、大明神をお祀りしたいとお考えでしたが、残念ながらその願いが叶うことなく1282(弘安5)年にご入滅されました。

その後、六老僧の一人で弟子の中でも師孝第一と仰がれていた日朗上人と南部実長公(この当時には出家して日円上人)は七面大明神を御祀りするため七面山へ登ります。当時の七面山は道無き山だったといひます。山頂近くまで登ると大きな石があり、その前で休息したところ、この大きな石の上に七面大明神(七面天女)が姿を現して日朗上人一行を迎えたといひます。日朗上人は、この大きな石を影嚮石と名付け、その前に祠を結んで七面大明神を御祀りし影嚮宮と名付けました。これが七面山奥之院の開創で、永仁5年(1297年)の9月19日のことでした。このことより、毎月19日を七面大明神の縁日としています。